

10月19日
報告

「于瑞雪さんの生涯をふりかえる集会」報告

村中 信行

「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」（以下「継承する会」）は「生きてこられて不思議だ」被爆者・于瑞雪さんの生涯をふりかえる」と題して和解を導いた力 Part4 の集会を10月19日、広島弁護士会館で開催しました。

「生きてこられて不思議だ」～于瑞雪（うずいせつ）さんの証言の中に出てくるこの言葉は生きて故国に帰還できた中国の人たちの共通の思いではなかったか、と思うのです。それほどに強制連行され、強制労働を強いられた人たちの生活環境は厳しく、食事は粗末、労働は苛酷でした。その上、于瑞雪さんは一瞬にして広島の街を焦土と化した大量殺人兵器・原爆を目の当たりにし被爆しているのです。まさに生きています方が不思議だったでしょう。

集会は第1部で于瑞雪さんの生涯の概略を1994年に市民グループが訪中調査をした当時のビデオとともにふりかえり、第2部では遺族である于蘭芬（うらんぶん）さん、于榮春（うえいしゅん）さんのお話を聞き、第3部は中国新聞社特別論説委員・岩崎誠さんの講演という構成で行ないました。司会はこの集会ではおなじみの杉原達さんです。

強制連行・強制労働そして被爆

于瑞雪さんは1944年、日本軍の捕虜となり、8月に安野発電所建設工事現場へと連行されました。工事現場では導水トンネルを掘ったり、土砂や石をトラックで運ぶ作業をさせられたりしていたそうです。安野に收容された中国人たちには、中国人に中国人を管理させるという分断支配のための大隊長—中隊長—班長という序列が作られました。大隊長は日本人の手先となって收容されていた中国人たちを支配し、虐待したため、中国人たちの



ビデオの中の于瑞雪さん

恨みや反感を買い、大隊長とその協力者だった班長が殴り殺されるという事件が起きました。1945年7月のことです。その容疑者として11人が広島刑務所へ収監されました。于瑞雪さんもその中にいました。そして8月6日、11人は広島刑務所で被爆したのです。皮肉にも刑務所の高く、分厚い強固な塀によって11人の命は助かったようですが、その後被爆による後遺症や病気に襲われることとなります。日本の市民グループが中国の河北大学と協力して安野の生存者・遺族を探中、1994年に于瑞雪さんと会うことができました。しかし、その時には来日して被爆者健康手帳の取得や治療などできる健康状態ではなかったそうです。西松建設に対しては謝罪と賠償を求めるといった闘いの意志をはっきり表明されたということです。1995年、于瑞雪さんは70歳の生涯を終えられました。

以上のような于瑞雪さんの半生を「継承する会」の川原事務局長が、集会の第1部としてビデオの映像とともに解説しました。その中で、大隊長が殺された事件について、生存者たちから聞き取り調査をした中で、于瑞雪さんだけがその事件のことを「蜂起」という言葉を使って証言したという説明は印象的でした。

生の声が伝える被害者の思い

第2部では于瑞雪さんの遺族である于蘭芬さん（三女・大連市）、于榮春さん（四女・大連市）に川原さんが質問し、お二人がそれに答えるという形式でお話を聞きました。コロナ禍により外国との行き来も制限されていたため、実に5年ぶりに遺族の生の声を聞くこととなります。通訳は雷民激（らいみんれん）さん（広島大学院生）と屈帥帥（くつすいすい）さん（大阪大学院生）のお二人です。

蘭芬さんによると瑞雪さんはとても厳しい人で子どもの頃はなかなか話しかけられなかったが、



技術者としては優秀だったようです。日本に強制連行されたことや原爆について初めて聞いたのは94年頃で、とても悲しい気持ちになったと話されました。体調を崩して定年より早く55歳で退職しましたが、歯がだめになったことを始めとして頻繁に入院を繰り返していたそうです。

榮春さんはもう少し詳しいお話をされ、瑞雪さんの前半生や国民党の部隊に入れられたことなどにも触られました。93年頃に強制連行や強制労働のことなどを初めて聞いたそ



うで、酒を飲んで時に苦しさをあらわしていたといいます。94年に市民グループの調査団が訪ねた後、いよいよ生涯の苦難を晴らすことができると笑顔を見ることができたとも話されました。榮春さんの話の中に、瑞雪さんは中国へ帰国した後、海軍の造船所の技術職に就き、（民間人から）軍人になる機会があったが、あきらめたというものがありました。中国の社会では強制連行とはいえ、日本に連行された経歴というのは大変難しい問題を持っていたようで、強制連行は決して戦時中の問題にとどまらなかったことをうかがわせます。

お二人の話から瑞雪さんの経歴だけではなく、ほんの少しかも知れませんが人柄が見え、また晩年の闘病の苦しき、その原因であろう原爆に対する思い～自分の病気と原爆は関係があるんだ！という苦い思いが、遺族の生の声で伝わってきたように感じられました。



戦争とは何でも有り、人間性も良心も壊れる

第3部は中国新聞社特別論説委員・岩崎誠さんの講演です。岩崎さんは市民グループが中国人の



強制連行問題に取り組み始めた初期の段階からその取材をはじめられ、強制連行された人の中に被爆した人がいたことが判明してからは特に熱が入ったようです。集会資料のなかに93年8月12日の特集記事がありますが、新聞の1ページをまるまる中国人強制連行にあてています。岩崎さんの署名記事です。これは中国人強制連行問題（安野の強制連行）について中国新聞では最大のページ割り振りだと説明されました。

講演は「戦後79年『獄中被爆』を問い直す」と題して、中国人強制連行の大まかな歴史的な経緯から、中国人被爆者がなぜ生まれたのか、それぞれの被爆者の戦後や西松建設との交渉、裁判、和解などについて自身の取材の経験も交えながら話されました。中国人被爆者の中でも、国防保安法違反事件と呼ばれる事件で広島刑務所に収監された3人が被爆したことについてのお話は考えさせられます。国防保安法違反事件とは、連行されてきた中国人の中に中国のスパイがいて彼らが破壊工作活動を計画している、そのことが国防保安法に違反しており、けしからんというような事件らしいです。岩崎さんはこの事件を、戦争によって国民とくに支配層の妄想が刺激され拡大したために引き起こされたえん罪事件だろうと説明されました。そして戦争では、何でも有りなんだ、人間性も、良心も壊れる、つまり何でも有りになる、そういうものではないかと話されました。このことは今、私たちもしっかり考えなければいけない問題ではないのか、まわりの状況、身近なところから世界まで、よく考えたいと思わせる話です。

第3部まで終わった後、質疑応答が行なわれ、最後に「継承する会」世話人代表の足立修一弁護士のあいさつで集会は終了しました。

